

足に障害を持つ僧主オイディプスから ペリアンドロスへ

ジャン・ピエール・ヴェルナン／
上村くにこ・饗庭千代子訳

レヴィイストロースは、『構造人類学』の中で彼独自の方法を示す一例として、オイディプス王についての分析を提起した。この分析は今では古典となったが、これについて私は、二つのことを特筆したい。第一にギリシア学者から見れば、この解釈には少なくとも議論の余地があるように思われること。第二に、この解釈が神話学のフィールドをあまりにも過激に変えたので、それ以来オイディプス伝説についての考察は、レヴィイストロース自身にとっても、また他の学者たちにとっても、今までにない新しい、そして実り多い道筋をたどることになったことである。

本論では、この新しい思考路線のなかの一つの面だけをとってあげようと思う。三代にわたるラバダコス一族には共通した特徴があり、それが重要な意味を持つていることに注目したのは、私が知る限りではレヴィイストロースが初めてであった。共通した特徴とは、歩き方が一方に傾いていること、身体の左右の均整がとれていないこと、二本の脚の一方に障害があることである。ラバダコスは足が不自由で、二本の脚

のサイズも強さも同じではなかった。その息子ライオスは、体の左右が非対称で、まったく不恰好な姿をしており、また左利きであった。三代目のオイディプスは膨れた足をもっていた。この三代にわたる男たちのギリシア語人名は、歩き方の欠陥や足の奇形を想像させるものだ。レヴィイストロースは最初、アメリカインディアン^{*}の神話に照らし合わせてこの三つの人名を解釈することができると考えていた。その神話によれば、大地から生まれた人間、インディアン（土着民）は運動の仕方や、大地を移動する歩き方が異常であるために、やっと現れ出たばかりの大地にしばらくつけられたままでいる、というのである。しかしギリシアの事実をアメリカのモデルに適用することは恣意的で根拠がなく、これは支持しがたい解釈であった。

レヴィイストロースはその後まるで取りつかれたように、ラバダコス神話を直接あるいは間接的に何度も取り上げ続けた。初期のころに打ちたてた仮説を引つ込め、いくつかの本質的な点について解釈を拡大し修正した。そのうちの二点をとりあげよう。それまで彼は、奇妙なことに「謎」のテーマをまったく扱わなかったのだが、コレージュ・ド・フランスの教授に就任したときの記念講義において初めて「謎」のテーマと歩き方のテーマを関連付けた。謎は答えから切り離して問題として理解するべきである、つまり答えることができないように、まさしく答えが謎に結びつくことがないため

※甲南大学国際言語文化センター非常勤講師

に、謎かけがなされるのであるという。したがって謎は二者間の言葉のやりとりにおける欠陥、あるいは伝達の不可能を示している。一方が質問するのに対しても一方は沈黙でしか答えることができないというのである。次にもっと最近の研究では、もっとも高度な抽象化のレベルの見地になつて、神話の骨組みから純粹に形式的な枠組みを引き出そうとして、さらなる仮説をおしすすめた。まっすぐに歩くことができない脚の障害、そして脚の替わりに舌に障害があるために不鮮明な話し方をして、聴衆にじかに話の内容を伝えることができない吃音、最後に、自分自身のうちで記憶を結び合わせることでできない忘却、といった類似したしるしを用い、軽率な行為と誤解のテーマとを結びつけることによって、オイディプス神話は、社会生活のさまざまなレベルで起こるコミュニケーションの欠陥やひずみ、膠着を説明しているのではないか、という仮説である。たとえば性的なコミュニケーション、命のコミュニケーション（正常な出産に対する不妊や奇形）、継承する世代間のコミュニケーション（父親から息子への地位や職務の譲渡）、あるいは他人との言葉のやりとり、自分自身とのコミュニケーション（頭がよく、はつきり自分を認識しているのに、それとは対照的に大切なことを忘れ、自己分裂・人格分離をきたす。オイディプスがそのいい例である）の欠陥である。

この新しいアプローチは、すでにテレンス・ターナーが示していた神話の解釈、そして私がソポクレスの悲劇を分析したときに示唆した解釈により近いものである。私はこのアプ

ローチを、脚の障害に関することに限ってここで考查してみたい。キュレネ市の起源に関する物語は、吃音に関係するが、すくなくともここでは触れないことにしよう。ギリシア学者たちの報告によれば、キュレネ市の創設はアルゴナウタイたちの「忘却」によって遅れ、デルポイの神アポロンとのコミュニケーションがうまくゆかないために、計画からはずれて回り道をするようになった。しかしバットスがあちこちさまよい、紆余曲折を経て町づくりを実現させた。「吃音者」を意味するバットスはバックス族の王朝の始祖で、最後の代のバットス王でこの王朝は終焉するのだが、ヘロドトスによれば、このバットスは脚に障害があり、自分の二本の脚でしっかり立っていることができなかったという。

私は、こうした解釈の枠組みの上になつて、神話と歴史的記述という、ジャンルのまったく異なる二つの物語、つまりラプタコス一族の伝説と、足に障害を持つラプタから始まるコリントスの僧主キユプセロスの王朝についてヘロドトスが記した物語との間に、共通した特徴をひきだすことがどの程度まで可能なのか検討してみたいと思う。

この試みには、あらかじめ一つの条件が前提となる。ギリシア人の間では「跛行」という言葉が示す範囲は、足や脚、歩き方の欠陥に厳密に限定されるべきものではないということである。空間における単なる移動だけではなく、別の方向へ象徴的に広げてとらえるべきであるし、また左右ちぐはぐで、ゆがんでおり、緩慢で動きがないように見える行動形態を、この言葉はすべて比喩的に表現できるのである。神話に

おける跛行の価値については、マルセル・デティエンヌと私の共著『知の策略』の中でかなり長々と説明しているのので、それをふたたびもちだすことはしない。ただ、跛行の両義的でアンビヴァレンツな性格をここでもう一度確認しておこう。正常な歩行に比べて、跛行には欠陥があるのが普通だ。足に障害がある者には何かが欠けている。つまり片方の足が長さや力、まっすぐさの点で必要をみたしていないのだ。しかし、通常の状態からこのように逸脱していることから、脚に障害を持つ者には、一般の人々を超えた特権的な身分、そして並外れた特別の資格が与えられることになる。跛行はもう欠陥ではなく、他にはない独特の運命を約束する徴となる。そうしてみると、二本の脚が非対称であることも、別の見方をすれば否定的ではなく肯定的にとらえられる。二本の脚が非対称であるおかげで、普通の歩き方に新しい拡張が加わることになり、歩く者は、一方方向にだけ向かって常にまっすぐ進むという普通の必要性から解放されるというわけだ。この点をもう少し詳しく説明しよう。脚に障害を持つ者の二本の脚は同じ平面上にはないので、脚を引きずって歩く。そのためジグザグに揺れ動く不均衡な歩き方になり、足跡は曲がりくねっている。正常な移動は、それぞれの脚が交互に前に出され、同じ道筋に沿って安定してまっすぐ進むのであるから、それに照らし合わせてみると当然この歩き方は欠陥ということになる。しかし極端な言い方をすれば、かしいだ姿勢で脚を引きずって歩くこの移動のスタイルは、移動の別のスタイルと言ひ換えられる。それは完全な円を描きながら、ぐらぐ

らと揺れながら歩く方法で、普通の歩き方より超人的で優れた歩き方である。この歩き方は、ギリシア人には、いくつかの種類の卓越した人間に特有の歩き方だと思われた。こうした人間たちに通じているのは、両脚を広げ、脚を交互に出して前に進む代わりに、側転するように円を描きながらあらゆる方向に進むことである。ぐるぐる回っている間に、上下左右の方向感覚は混乱し、前と後の対立もなくなる。前後の区別があるおかげで正常な人間の歩く方向がきまるのだが、それはまた歩行の厳しい制限にもなる。脚の悪い神へパイストスが仕事場で轡のまわりを廻るときの歩き方も、こんな風に円を描いていた。完全な存在であった原初の人間の歩き方も、今日の人間とは違って円を描いていた。この完全な人間が、前と後の境目に沿ってまっぶたつに切られたことによって、現在の人間となったのである。『饗宴』の中でアリストパネスは、原初の人間の歩き方を生き生きと語っている。四本の足がそれぞれ他の三本とは違った動きをするおかげで（言うまでもなく四本の腕もこれを補う）、まるで車輪のように、回転しながら前進も後退も自在である。原初の人間は、脚に究極の障害を持つ者、全方位の不具者ともいえるのである。円を描くように移動するその移動スタイルは、さながらあのへパイストスが自身の姿に似せて作った、回転する台車のついた三脚台のようであった。へパイストスは魔術によって、これらの動く自動人形を前方にも反対方向にも同じようにたやすく移動できるように作ったのであった。また太陽の島の動物たちにも似ている。イアンブロスによれば、動物たちは

回転しつつ歩いていたり、普通の人間よりも鳥の住人である動物のほうが優れていることを証明する、数ある不思議の一つである。

しかしギリシア人にとって、跛行は足のことだけではない。精神の跛行をも意味するのである。(正反對の者が精神の跛行者である) 敏捷ですばしい頭脳をもち、両足が地についたまっとうな生き方をする者とは正反對の者が精神の跛行者がある。この考え方はプラトンの『国家』第七巻に見ることが出来る。プラトンはその中で、生まれが良く哲学(学問)に向いている人間と「障害がありゆがんでいる」人間とを区別している。このように区別した上で、当然のこのようにプラトンは、知的な跛行を私生児と同じに扱っている。脚の不自由な者は私生児であり、直系の合法的な血筋から生まれた嫡出子ではない、つまり父親に似た息子ではないというわけである。嫡出子であれば、血筋はゆがまずまっすぐに保たれているので、父親は、息子を法になつて異常も奇形もなく産むはずだから。不具と血統の關係に關して重要な決め手となるのが、次の二つのテキスト、クセノフォンの『歴史』三、三、一、三とプルタルコス『アゲシラオス』三、一、九である。スパルタ王アギスが亡くなり、後継者を選ばねばならなくなった。アギスには息子レオチキダスと弟のアゲシラオスがあった。普通なら先王の弟ではなく、息子が王位を継承することになるはずだった。その上アゲシラオスは身体的にも脚が不自由だった。ところが息子のレオチキダスは、アルキビアデスの私生児ではないかと疑われていた。アルキビアデスが

スパルタに滞在していたあいだ、アギス王の後ティマイアを愛人としていたことは周知の事実であった。そのとき古い師のディオパイテスは、レオチキダスの立場を擁護するために、それまで引き出しに隠していた「古い神託」を取り出してきた。それはスパルタに警戒を呼びかけるもので、要約すると次のように記されていた。「二本の足でしっかりと立っているスパルタよ。用心せよ。いつの日か汝の王国が不具になることがないように。そんなことになれば、汝は数々の災禍に悩まされることであろう」。こうしてアギスの王位継承は、脚に障害のある王の弟と、私生児ではないかとうわさされている息子の間で争われることになった。脚に障害を持つ者と私生児ではどちらの方がよりゆがんでいるのだろうか。スパルタの將軍リュサンドロスとスパルタ人たちの答えは疑う余地のないものだった。クセノフォンによれば「神は、転んだために脚に障害をもつようになった男を警戒するようにと命令したのではなく、本当の血筋の出ではないのに国を支配するような男に氣をつけるようにといったのだ。その男が王位に就くときには王権がゆらぐであろう」。またプルタルコスもこう言う。「脚が不自由になった男でも統治することはできる。しかしもし王が正当な者ではなく、ヘラクレス一族の出でもないならば、そのために王権は不安定になるだろう」。

この見地からラバダコス・ライオス・オイディプス、そしてオイディプスの二人の息子であるエテオクレス、ポリュネイクスという四代にわたる血のつながりを検討してみよう。脚に障害を持つラバダコスは、息子ライオスがまだ一歳の赤

ん坊のときに亡くなる。父と息子との間の正常なつながりが断ち切られたので、正統な血統は中断し、王座は異国の人であるリュコスが占めることになる。若いライオスは王座から退けられただけでなくテーバイからも追われ、ペロプスのもとに逃げ込む。

左利きのライオスは成人し、性的な関係においても、彼を迎え入れてくれた主人ペロプスとの関係でも、一方通行のゆがんだ関係をもつようになる。まず、ペロプスの息子である若いクリュシッポスに対して、行き過ぎたホモセクシユアルな性行動におよんで暴力を働き、性愛の行為をゆがめてしまう。恋人同士の間にも、主人と客人の間にも、両者の対称性と相互性はなくてはならないのだが、彼はそのルールを破ってしまったのである。クリュシッポスは自ら命を絶つ。ペロプスは、ライオスに対して一族が絶えるようにという呪いをかけた。ラブラコス一族の子孫はもう続くことなかれというのろいである。

ライオスはやがてテーバイに帰還して再び王位につき、イオカステ（またはエピカステ）と結婚する。しかし彼は子どもを持つてはならないと神託によって告げられる。その血統は不妊の宣告を受けて、滅亡する運命にある。もしこれに従わず息子をもうけるならば、その「正統な」子どもは、父親と似ていることで血筋をまっすぐに存続させるのではなく、父親を破滅させ自分の母親と床を共にするだろう。高貴な生まれの者が、私生児より劣る怪物だったということが明らかになるだろう、というのである。

ライオスは子どもができないように、妻とゆがんだ性関係、ホモセクシユアル同士のような関係を結ぶ。しかしある夜、酒に酔って用心を忘れ、妻の敵に子どもを種をまいてしまった。まったく正統であるのに呪われて生まれてきた子どもは、生まれるとすぐにテーバイから追放され、キタイロンの地に遠ざけられて、山中で野ざらしにされて死ぬはずであった。しかし結局子どもは近くにとどまり、同時に遠くへ行くことになった。つまり死を免れたわけだから、ここ、この世にとどまった。しかしもともと居るべき場所から遠くに追い出されて、彼の行く道は変えられてしまった。彼の足には、彼の出自と捨てられたことを示す痕跡が残っている。彼は結局コリントスで見知らぬ異国の人を自分の親だと信じて一緒に暮らし、ふくれ足という名前を名乗っている。この名は、生まれるやいなや追い出された血筋を示すと同時に隠している。

オイディプスの物語は自分の生まれ故郷への帰還の物語であり、呪われた嫡出子による、血統な血筋への復帰の物語である。彼はブーメランのように帰還を果たす。ちょうど良い時期をみはからって、必要な条件が整った中で、世代の正統な秩序にのっとった正しい継承を行なうために帰ってくるのではなく、暴力でもって分を越えて行きすぎたアイデンティティを手にいれてもどってくるのである。つまりオイディプスは、父親が退いて明け渡してくれた地位に、順番がめぐってきて順当に引き継ぐのではなく、父親を殺し、母親と交わることによって父の座を奪うのである。彼はあまりにも遠くまで後戻りしすぎた。オイディプスは自分を息子として産ん

だその腹の中に、夫として入ることになった。そこから出てくる権利は無かった腹の中に。

神話のこうした面を明らかにするシーンが二つある。まず第一はオイディプスとライオスが出会うシーンである。少年期をすぎて成人男子となったオイディプスが、自分の両親だと思い込んでいる人たちから逃れるためにコリントスを後にし、デルポイを通して自分の故郷であるテーバイに向かっていったちょうどそのころ、ライオスは反対にテーバイを苦しめているルポイに向かって進んでいた。テーバイの町を苦しめているスピUNKスの禍について、神託を求めるためだった。二人の男は三本の道が分かれている三叉路で出会う。しかしその道はあまりにも狭く、両者が向かい合ってすれちがうことは無理であった。この同じ狭い道を一方がゆずって、交代で順に通過すれば、ぶつかり合うことも混乱することもないのだが、父と息子はそうはせずに、乱暴に互いを押しのけあつて体が接触したので、対決するしかなかった。脚の不自由な二つの世代は、交代するのではなく衝突するのである。オイディプスは父親を殺し、父親は戦車の高みからオイディプスと同じレベルまでころげ落ちた。

二つ目はスピUNKスの謎に関係した場面である。パウサニアスがテーバイから持ち帰った異本には、スピUNKスはライオスの私生児であり、彼女の役割は王の息子たちをすべて試して、本当の息子が私生児かを区別することであると記されている、これは我々の研究には非常に貴重な資料となる。

また別の説によれば次のような話がある。「スピUNKスはラ

イオスの私生児であった。スピUNKスを特にかわいがっていたライオスは、デルポイがカドモスに与えた神託をスピUNKスにそつと教えた。この神託を知る者は、歴代の王だけであつた。ライオスには非嫡出の息子たちがおり、その中の誰かが王権を主張してスピUNKスのもとにやってくると、スピUNKスはわざと次のような問いを出した。『もしおまえたちがライオスの血筋をひいているのなら、カドモスにくだされた神託を知っているはずだ』。デルポイの神託はイオカステおよび、ライオスとイオカステの間に生まれた息子たちだけにかかわることを述べているので、非嫡出の息子は答えることができない。するとスピUNKスは彼らを、王座に対する正統な権利を持たないものとして死をもつて罰した。しかしオイディプスは夢の中で教えられていたため、スピUNKスの元に現れたときは神託の内容を知っていたのである」。

つぎに謎そのものを見てみよう。スピUNKスの謎はもちろん歩き方に関するものである。オイディプスの場合にはレヴィIIストロースが考えていたよりずっと深く、謎と歩き方は関連している。スピUNKスの謎は、どのように移動するか、その歩き方で人間を定義する。しかも、地上、空中、水中を前進し、移動する、人間以外のすべての生き物と反対のものとして定義するのである。人間は四本足や二本足で歩いたり、飛んだり、足がなくて泳いだりするあらゆる動物と反対の生きものである。動物たちはいずれも、生まれてから、成長し、生きそして死ぬまでずっと同じ移動の仕方をする。人間だけが四本足、二本足、三本足という三つの異なった型の歩き方

を次々と身につけて、移動の仕方を変えるのである。人間だけが、ただ一つの声、唯一の本質をもつていて常に同じ存在であると同時に、別のものにもなる生きものなのだ。子供、成人、老人の三つの年代、三つの異なった身分を経験するところが、人間以外のすべての生きものと違うのである。各々の年代には特別な社会的身分があり、集団における地位と役割も変わる。人間はそれらの年代を次々とそれぞれ定まった時期に巡らなければならない。そして各個人の人生における年代の連続は世代の連続と連動するべきであり、世代の連続を尊重してそれと調和しなければならない。そうでなければ混沌に逆戻りしてしまう。したがって人間の身分は時間の順番に縛られているのである。

ところで、オイディプス Oidipos は謎を解く。彼自身は *ditous*、二本足の人間なのである。しかし彼の犯す過ちは、というよりむしろ脚に障害を持つ血筋を苦しめているのろいとは、謎を解き、答えと質問を結びつけることによって、自分が生まれたところに戻り、父親の王座につき、母親のベッドにもどるはめになったことである。血筋の連続の中でまっすぐに歩いて人生を前に進む人間のようになるのではなく、成功者としてスピנקスの言葉が連想させるような怪物になるのである。彼は同時にそして一度に二本足、三本足、四本足である生きものになる。つまり自分の年代に沿って世代の社会的宇宙的秩序を尊重するのではなく、それをかき乱し狂わせる人間になるのである。二本足の成人であるオイディプスは実際、杖を頼りに歩く三本足の老人である父と同じだ。

この父から彼は、テーバイのトップの座と、イオカステのベッドまでも奪ったのである。さらに子どもたちとも同じになる。四本足で歩く赤子たちは、オイディプスの息子であると同時に兄弟でもあるのだ。

彼がもうけた二人の息子、エテオクレスとポリネイケスは、父との間でも、兄弟同士でも正常に意思の疎通を図ることはないだろう。かつてペロプスがライオスを呪ったように、オイディプスも彼らを呪うことになる。さらにオイディプスとライオスがそうしたように、二人の息子たちは対決し、殺しあい、死を迎えて始めて一緒にになる。このようにラバダコス一族の血統は、脚に障害を持つ星の下で長い回り道をしたあげく、まっすぐに続いていくのではなく、消滅しつつ出発点に戻る。脚に障害を持つ者の息子である左利きのライオスは、正統な子孫を生み出すことが出来ない。

次に「歴史」と神話をつきあわせるためにヘロドトスの話に移るが、その前に私はこれまでの他の多くの問題にならって、脚に障害を持つ者にふりかかった不幸の物語を通じて神話が投げかけている問題、物語が探究するいわば隠れた部分について述べることをお許し願いたい。

人間は、生きている間に三度違う存在になるのに、どのようにして同じものの性質を保ち、同じものの中にしっかりと根を張ることができるのか。人生の各年代に身分を完全に変えねばならぬと定められた人間が、どうして秩序をいつまでも保っていくことができるだろうか。身分や機能を継承していくのは別々の違う人間であり、また同じ人間が順番に、息

子、父、夫、祖父となり、若い王子から年とった王へと変化してゆくのに、王、父、祖父、息子という身分や機能が、そのまま変わることなく残ってゆくのはどうしてなのだろうか。さらに、息子が父親の足跡をまっすぐにたどって、父親の占めていた地位に就くにはどんな条件が必要なのだろうか。地位がいままで変わらず存続するほど十分に自分の産みの親に似ていることなのか、それとも順繰りの交代が不透明な混乱にいたることがないように、親とははっきり異なっていることであろうか。

さてこれから、ヘロドトスの『歴史』五・九二と三・五〇、五四に書かれている物語の構成を研究することによって、紀元前五世紀のギリシア人たちが僭主というものに対して抱いていた人物像を明らかにしてゆきたい。

コリントスのソクレスは、自分がよく知る立場にあったキエブセロス一族の身に何が起こったかを、ラケダイモンとその同盟諸国の人々に語ってきかせた。ヘロドトスによれば、それは僭主政が「この世においてもつとも不当で残忍なもの」であると人々に警告するためであった。ヘロドトスの筆による「歴史」はおおあさんのお話のようであり、またおとぎ話のようでもあり、また悲劇のようでもある。奇妙な逸話がいくつも語られ、思いがけない展開が繰り広げられていくにつれ、免れ難い必然性が見えてくる。ヘロドトスは次のように書く。「エエティオンの子孫はコリントスの災厄の因となる運命であった」。まるで、あらかじめ神々に定められた不幸が国のど真ん中に君臨し、呪われると同時に選ばれたアウトサイ

ダーの一家に、不幸が訪れるべく運命づけられていたと言わんばかりである。エエティオン一族の人物たちは、その異常な出自のために、生まれる前から既に僭主の役割を演じるように定められていたのである。

この頃までコリントスは寡頭政治を敷いていた。権力を独占していたのはバッキアダイという小さな集団で、共同で王国をとりしきっていた。バッキアダイたちは仲間うちで特権を保つために、一族の間だけで婚姻を結んでいた。自分たちの娘を、グループ内で妻として互いに交換すると決めていたのである。だからバッキアダイたちは、ただ王権を複数で行使するだけでなく、国の頂点にあつて王族の集団のリーダーのような役割をはたしていた。ところで一族のうちの一人に、ラブダという名前の脚に障害のある娘を持つものがいた。バッキアダイのなかに、彼女と結婚しようという者は誰もいなかった。ラブダは障害のために彼女が属している一族から疎外されていたのである。脚に障害を持つ娘は正しい家系から遠ざけられ、当然この直系の血筋を存続させる女であるはずなのに、そこからはずされるのだ。あるいはおそらく、ルイ・ジェルネが示唆しているように、結婚と、足の障害との関係を逆に考える必要があるかもしれない。つまり「規格にはずれた結婚をしたために、脚に障害のある娘と呼ばれるようになった」と。脚に障害があるためにルールにしたがった結婚ができなかったにしろ、規格にはずれた結婚をしたために脚に障害を持つ娘と名づけられたにしろ、いずれにしても彼女は正統なバッキアダイの息子を産む資格を持たない。生

みの父親に似た、父親の正しいコピーである息子を生むことができないのである。父なる王を約束されている他の一族とは違って、ラブダの子どもは母親から脚の障害者の生まれを受け継ぐことになるだろう。

普通なら当然彼女の求婚者となるような男たちに拒否されたので、ラブダはラピタイ族の出でカイネウスの後裔であるコリントス人の男を夫とした。このカイネウスは結婚するまでは、ティレシアスのように男でも女でもあるアンドロジナスだったというのである。アンドロジナスは女々しい人間にも超男性的な人間にもなれるというあいまいな性格をもっていたが、その異常さ、奇妙さゆえに、両性具有者は性的には一種の不具と結び付けられる。アンドロジナスは身体の一つの側が両方とも男性ではなく、半分が男、残りの半分が女なのである。ヘシオドスが別の人物について両性具有と不具をまったく同じように扱っているのを読むと、そのことはいっそうよく納得がいくであろう。そのテクストによれば、ブレイステネスはアガメムノンとメネラオスの父であり「両性具有者が不具であった」とある。

性的な不具者であったライオスと同じように、ラブダの夫もまた自分の子孫について神託を請うためにデルポイにやってくる。というのも彼はラブダとの間にも、又他の女性との間にも子どもができなかったからである。これもまたライオスと同じように、彼もまた子どもを得ることがいつかできるのかどうかを神の口から聞きたいと思った。ライオスへのアポロンの返事は禁忌と脅しのことばであった。「汝は息子を

もつてはならない。もし汝に息子が生まれれば、その子は汝を殺し、自分の母親と床を共にすることになろう」。ラブダの夫エティオンへのアポロンの答えは単刀直入なことばであった。「ラブダは身ごもっている。彼女はやがて転がる石を産み、それは支配者たちの頭上に落ちてコリントスを懲らしめるであろう」。

正統な血筋から遠ざけられた脚に障害を持つ娘はやがて息子を産む。その子は、山を転がり落ちる石さながらにくるくる回転しながら、母も自分も追い払われた地に戻っていくのである。そしてコリントスにとって不幸なことに、この追放者の帰還は、まるで九柱戯（ボーリングに似たゲーム）で投げられたボールのように、二本足の大人、完璧な人間である王族のトップ集団、正統な最高権力者グループを地面になぎ倒すことになるのだ。

これはわれわれがオイディプス物語の中に読み取ることができた図式と類似しているが、物語の主人公たちの置かれた状況が様々な点で異なっているためにこの類似がいっそう際立って強調されている。オイディプス物語の場合は問題になるのは正統な息子である。生まれた後に実の親に捨てられ、彼が属しているラブダコス一族の、王家のそして脚に障害のある血筋から追放される。彼がテーパーバイに戻ってくるのは、自分がコリントスを逃れることで養父母を救いたいと願ったからである。この両親は彼を息子として迎え入れたのであり、彼自身も実の子だと信じているのだが、ほんとうは非嫡出子なのだ。彼がテーパーバイに帰還し、王の地位を奪って破壊に追

いやった者こそ、実は彼の直系の両親であつた。オイディプスはそれが両親だとわからず、異国人だと思ひ込んでいたのである。二番目のケース、つまりラブダの場合はすべてが子どもが生まれる前に起こる。息子は母親の胎内にいるときに母親を通じてすでに排斥され、本来の血筋に比べて劣つた、非嫡出の、そして脚に障害を持つ家系に貶められている。したがつて後に彼が石のように転がり落ちて、コリントスの正統な血筋を体现している国のトップ集団を襲うのは、この脚に障害を持つ実の両親、彼が嫡出子である両親とすべて合意の上でのことなのである。彼ら国の最高権力者たちは彼をあらかじめ脚の障害者に生まれつくように運命づけ、自分たちの正統な息子だと認めず、バッキアダイの血筋とは無縁のよそ者にしてしまったのだから。そしてこのよそ者が戻つてきてバッキアダイの血筋を消滅させることになるのである。

捨子のテーマは歴史物語でも神話でも重要な位置を占めているのだが、主人公たちの家族状況が最初にこのように異なっているために、このテーマは変わっていくのである。オイディプスは実の父母に捨てられる。彼らは息子が死ぬことを願つて、羊飼いに託した。羊飼いは生まれたばかりの赤ん坊を死なせる決心がどうしてもつかず、別の羊飼いにその赤ん坊を渡し、この羊飼いは、自分の主人であるコリントスの君主の手に彼をゆだねる。こうして予想に反してオイディプスは遺棄されて死ぬことから免れたわけだが、彼の名はこの「さらされて死ぬこと」に由来している。身体の障害を思い起こさせる彼の名前は、彼の運命の前兆のようなものである。

この身体障害は、彼が捨てられたことによって体に残された痕跡だということもできるし、彼がラブダコス一族の不具の家系に確かに属しているというしるしだということもできる。

ラブダが産んだ赤ん坊もまた、生まれるとすぐに、幼いオイディプスのように捨て子という試練を受けることになる。しかし見かけはオイディプスの受けた試練と同じでも、意味は逆である。脚の不自由な母親は子供が見つけれないようにと、巣箱として使われていたテラコッタの容器の中に自分の子供を隠して安全になるのを待つたのである。このように赤ん坊を捨てたふりをする、家の中で姿が見えなくなつたように見せかけることと、遺棄することは同じではない。捨て子の目的は、子供を遠くに厄介払いして人里はなれた山の荒原で猛獣の牙にかけてその命を絶つことであるが、ラブダの場合はそれとはまったく反対に、子どもの姿を見えなくするために家の真ん中に隠して、子どもを守り命を救つたのだ。子どもを生かしておきたいのはバッキアダイたち、つまり権力と正統な血統のトップ集団である。彼らはエエテイオンに下された神託の意味を理解すると、ひそかに赤ん坊の命を奪うことを決めた。ラブダが出産するやいなや、国のトップたちは十人のメンバーからなる代表団に子どもを殺す使命を託した。脚に障害のある母親の家に向かう道すがら一行は、母親は何の疑いも抱いていないから、すっかり信用して赤ん坊を自分たちの手に抱かせてくれるだろう、最初に抱いた者が家の戸口で土間にたたきつけてその使命を果たすことにしよう、と取り決めた。しかし脚に障害のある血筋はコリント

スに涙の代償を支払わせる「定めにあった」。ヘロドトスが「神の幸運」と書いているように、神の摂理の偶然によって、バッキアダイたちの一人の腕に抱かれたとたん、赤ん坊がその男に向かってにつこり笑ったのだ。その男は哀れを催し大急ぎで隣の者に赤ん坊を渡した。隣の者も同じようにして次の者に渡し、こうしてその赤ん坊は暗殺の使命を担っている十人の手から手へと一巡し、最後に出発点つまり脚に障害を持つ母親の腕の中に戻ってきたのである。バッキアダイたちは外に出て、門口のところで互いに責任をなすりつけあつてけんかになった。そこで彼らはもう一度ラブダの家に入り込んで一緒に暗殺を執行することに決めた。しかし入口の戸の後ろで彼らの話を聞いていた母親は、誰も探そうとはしないような場所、蜂が出てしまつて空になつた「蜂の巣」(Kubele)の中に子どもを隠すのに間に合つた。バッキアダイたちは家中探してもむだであつた。子どもは本当に家から消えていなくなつてしまつたかのように見づからなかつた。

こうして脚に障害を持つ母親から生まれた息子も、オイディプスと同じように死ぬ運命を免れるわけである。オイディプスと同様に、彼の名前もこの挿話に由来するもので、生まれた時のこの上ない危難災禍と思ひもよらない救済を同時に連想させる名前である。彼はキュプセロス、つまり蜂の巣 (Kubele) の子どもと名づけられたのだ。このエピソードによつて、オイディプスとキュプセロスの間には一致する事項がいくつもあることが明らかにする。生まれたばかりの赤ん坊が、一人の羊飼いかもう一人の羊飼ひへ、つぎにコリ

ントスの王へと、あるいは一人のバッキアダイから隣にいるバッキアダイへと、手から手へと渡されて死を免れるのである。いずれの場合も殺人者たちは用心して事実を話さない。十人のバッキアダイたちもライオスの羊飼ひも、できごとについて口を閉ざすことにし、使命を果たしたと断言して、不吉な子どもは殺されたものとまわりのものに信じ込ませている。

少年期を経て二本足の大人になると、オイディプスはデルポイに赴き自分の生まれについて神託を求めた。その答えを聞いて恐れをなしたオイディプスはコリントスに帰らずにテーバイに向かい、やがてその僭主になるのである。

ラブダの息子もまた、オイディプスと同様大人の年齢になるとすぐ、デルポイの神託を伺いにやってくる。神は彼を「コリントスの王」として扱い、彼にコリントスに向けて進撃し、町を奪い取るようにはっきりと勧めた。こうしてキュプセロスはコリントスの僭主の座に収まり、多数のトップ集団を殺した。

僭主の人格の真の特徴的性格を帯びるようになるのは、息子のペリアンドロスである。と言うよりペリアンドロスは、キュプセロスの後を継いで父親の責務をやり遂げたというほうがむしろあつてゐる。父親の僭主としての目的を、息子の彼が余すところなく完璧に実現するのだ。ヘロドトスは次のように記している。「キュプセロスがやり残した殺戮、追放をペリアンドロスはすべてやり遂げた」。まずは男たちから。他の者より少しでもぬきんでゐる者があれば、ペリアンドロスは誰であらうと切り落として地面にたたきつけた。ちょ

うどオイディプスがライオスを戦車の上から彼の足元の地面に杖で打ち落とししたように。続いて女たちも殺した。ギリシアの伝承では、ペリアンドロスはオイディプスと並ぶ僭主の典型とされている。ひそかに実の母親クラテアと交わつてもいたようだ。脚に障害を持つ母親から出た子孫にとつて、王国の父たちを殺してしまえば、あとは母親の床で寝ることしかない。母親が何を象徴しているかを、その名前がはつきりと表している。それは、僭主が完全にわが意のままにするポリスの権力(クラトス)である。

ヘロドトスの物語には母親との近親相姦の話は登場しないが、父の殺害に関連した奇妙なシーンがあつて、これがおそらく近親相姦に類する話だと思われる。ヘロドトスの物語では、国の最高権力者グループ全体の男たちの運命に触れ「キュプセロスがやり残した殺戮と追放をペリアンドロスがやり遂げた」と述べた後、すぐに女たちの話題に移っている。「ペリアンドロスは自分の亡き妻メリッサのために、コリントスのすべての女たちの衣装をたつた一日のうちに剥ぎ取らせた」。彼はヘラの神殿に、自由の身であれ奴隷の身であれ、いっしょくたにしてすべての女を集めさせ、彼女たちが身につけていた晴れ着や装飾品を剥ぎ取った。僭主はコリントスの女を一人残らずひとまとめにして服を脱がせ、一気に裸にしたのである。それはまるでコリントスの女という種族がひとつになって、自身の妻の死によって空席になっている座を占める使命を担っていたとも言わんばかりである。

この僭主政、脚に障害を持つ者の王国の成功はそれほど長

い間続くことはないだろう。神託はキュプセロスが権力への道を切り開くことにゴーサインを出したが、はじめから期限を切っていた。ラブダの子孫はライオスの子孫と同じようにその期限より先は存続することが出来ない。神は「エエテイオンの息子、名高いコリントスの王、キュプセロスよ」と宣告し、そのあとすぐに付け加えてこう言った。「王になるのは彼とその息子たちまでだ。孫の代までは及ばぬ」。ラブダの腹から出た「転がる石」が引き起こした衝撃の効果は、三代目ではもう効き目がないのである。二代にわたつてコリントスの王座を占めてきた脚に障害を持つ血筋にとつて、運命が揺れ動いてひっくり返り、不幸と死に打ち沈むときがやつてきた。

ヘロドトスの『歴史』の第三書につけられた長い付説は、コリントスとその植民地であるケルキュラとの敵対関係を扱ったものだが、この転覆劇は其中に詳しく語られている。ラブダコス一族の血統の消滅についてはさきほど簡単に触れた。ラブダコスの血筋の滅亡は、初めはライオスに対して予言され、オイディプスのつかの間の王位在位の後、彼の二人の息子たちの悲劇的な死によって現実のものになった。息子たちは二人そろつて父と対立し、また兄弟同士も互いに相容れずお互いに殺しあうことではじめて一つに結びついた。ラブダから出たキュプセロス一族の最期について、ヘロドトスを参照しつつ、ここで詳しく追つてみたい。ペリアンドロスにも妻メリッサとの間にほとんど同年齢の二人の息子がいた。二人の兄弟に共通しているところは何もなかった。ペリアンドロスの不幸を要約すると次のようになる。彼の長男は父に

似ていて、また父に忠実であつたが、才氣がなく軽率で思慮に欠ける点では父と反対であり、自分の考えて自分自身を理解することができず、ものごとを覚えておくということもできなかった。次男はよく頭がまわり、性格は頑固で、正確な記憶力を持っているという点でペリアンドロスそっくりであるが、父との交流を拒み、言葉をかけることもなければ、父の問いに答えることもなかった。長男は忘却、次男は沈黙。ラブダの子孫は、どちらの場合もコミュニケーションのルーツが妨げられているのである。

悲劇は、ペリアンドロスが激怒してメリッサを滅多打ちにして殺したことから始まった。二人の息子たちの母方の祖父でエピダウロスの僧主プロクレスが、孫たちを自分の下に呼び寄せ、精一杯の愛情をこめてもてなした。二人をコリントスに送り返す前に祖父はこうたずねた。「お前たちの母親を殺したのが誰なのかおまえたちは知っているか?」。兄のほうはこう言われてもまったく知らん顔であつた。その意味が理解できなかったもので、この言葉を心に留めることもなく忘れてしまった。弟のリュコプロンは明かされた秘密に大変ショックを受けて、母親を殺したのが父親であると悟り、国に帰ってから父に一言も口をきかなくなる。「父親が話しかけても言葉をまったく返さず、父親に何かたずねられても答ええなかった」。怒ったペリアンドロスは彼を宮殿から追い出してしまった。

父親は、「理解すること」も覚えることもできないもう一人の息子を質問攻めにして、やっと下の息子が何を悩んでいる

のかを自分自身で「理解する」事ができた。そこで父は、すべての者にこの息子を家に迎え入れることを禁じた。彼を追い出すようにという命令がすべての人に発せられた。父と言葉を交わすことを拒んだために、リュコプロンはいたるところでたたき出され、追放されて、親に捨てられた子どものように家も家庭もない人間になってしまった。リュコプロンの身分はいまいである。ペリアンドロスの命令によって一切の社会的絆を断ち切られ、孤独の中に切り離されて「ポリスを持たない者」の立場に置かれているが、正統な血筋に生まれたために、僧主として父の後継者とみなされていることにかわりはない。彼はその出自によってあらかじめポリスの頂点に、庶民よりぬきんでた高みに押し上げられていたのだが、追放者の身分となつて、それと同じくらい低い下部に投げ捨てられたのである。「人々にとつて彼はまぎれもないペリアンドロスの息子なのだから、皆は不安を抱きながらも彼を迎え入れた」。

リュコプロンを徹底的に追い詰めるために、ペリアンドロスは伝令官に命じて、彼を家に入れたり言葉を交わすものは、誰であれ重い罰金を課すと布告させる。そのためこの若者と言葉を交わそうとするものは誰もいなくなった。リュコプロンはこのような完全に孤立した、交流のない状態に頑なに甘んじていた。王位継承の正しい道筋を父に従つてまっすぐに進んだなら、宮殿の中で彼にふさわしい場所にいたであろうに、それを拒んだために彼は「柱廊の下をねぐらに」体を丸めて国中をさ迷い歩いていた。かつてキュブセロスは転がる

石となり、それが飛び跳ねたために王国の父たちは地面にたたきつけられたのだが、そのキュペセロスの孫も、今では転がる石さながらである。ただし今度は、「転石苔を生ぜず」というフランスのことわざのとおり、一つの場所に留まっていることができない不運の石である。

リュコブロンはもはや何も食べるものもなく、しだいに衰弱していった。そんなある日、ペリアンドロスはきたなく汚れやつれたリュコブロンに出会う。彼の怒りは和らぎ、僧主政と彷徨の人生とどちらがよいかと息子にたずねた。「お前は私の息子、豊かなコリントスの王だ。宮殿に戻って来い」と。それには答えず、リュコブロンは、自分と話をしたのだからお父さんも罰金を支払わなければいけない、とはっきり言った。

そこで、贖罪の羊を追い出すように、自分の目に触れないようにと、ペリアンドロスは息子を遠くケルキュラに送った。オイディプスはもう何も見ることがないようにと自分の目を抉り出したのだが、ペリアンドロスは息子を見ないですむようにと息子を遠くに遺棄するのである。

しかし時間も人間も移ってゆく。ペリアンドロスはしだいに老いていった。二本足の人間は今や三本足になり、彼は権力者としての責任を果たすことができなくなったのを感じていた。地位を息子に譲る時がきたのだ。ところが、上の息子は才気に乏しく敏捷性に欠け、父親の足跡を歩むにはあまりにも魯鈍で役に立たない。そこでペリアンドロスは下の息子にまず使者を、そして次に彼の姉に当たる娘を送り、コリントスに戻ってきて、当然継ぐべき王位に就くようにと説得し

た。この姉は弟リュコブロンに次のように説明した。「僧主政は不安定で長続きしないものです。手に入れたと思う者は大勢います。そなたの父は今では年老いて、力を頼みとする年代は過ぎ去りました。そなたのものである財産を他の者たちに与えてはなりません」。しかしリュコブロンは、父親が生きている限りコリントスには戻るまいという自分の決意を頑なに押し通した。この決心はオイディプスがデルポイで決めたことと似ている。オイディプスは自分の父親が生きてそこで暮らしている間は、コリントスには足を向けまいと心に誓ったのだ。この二つの話はよく似ているが、次の点で異なっている。オイディプスは、憎しみからではなく愛しているがゆえに父親を避けているのだが、その父親は実は他人である。だからこそ両親から遠ざかるうとして旅に出、途中で見知らぬ男と出会うことになった。オイディプスがぶつかって暴力沙汰になったこの男が実は彼の本当の父親だったのだ。

息子の反抗に対抗するために、ペリアンドロスはひとつの解決策を考え出した。最も近い血縁関係にありながら、居住地も気持ちも最も遠くへだっている親子の間で王位継承をなしとげようと知恵をしばったのである。これまでラブダコス一族の子孫が経験したような不幸を引き起こすことなく、この困難な問題を解決するための策が必要だった。ペリアンドロ스가三番目の使者を通じて息子に提案したのは、二人が顔を合わさずに互いの立場を交換しようというものだった。つまりリュコブロンはコリントスに戻って僧主政を引き継ぎ、

一方ペリアンドロスのほうはケルキュラにやってきて永久にそこにとどまるというのだ。リュコプロンは承知した。このクロスシャッセによって、ちょうど良い時期に、嫡出の息子が正統な地位に復位して、父の玉座に就くのだから、これですべてが解決するように見えた。オイディプスは生まれ故郷に帰還する途中で、反対方向に進んでくるライオスと衝突しなければならなかったが、リュコプロンの場合はそれまで完全に切り離されていた老人と若者が出会ってぶつかったり、反目しあうことはないのだから。

論理的にはすべてが解決したように思われる。しかし神託はやはり神託であった。デルポイの巫女はキュプセロスに「コリントスの王になるのはおまえと息子までだ。おまえの息子の息子までは続かない」と宣言していたのだ。いよいよ交代を実行するという時に、ペリアンドロスとリュコプロンの交代計画を聞いたケルキュラ人は、父親の跡を継がせまいとしてリュコプロンを殺してしまった。こうしてラブダの子孫も、ラブダコスの子孫と同様、世代交代をして正しい血筋を継続することができず、消滅してしまうのである。

このように、テバイ伝説のラブダコス一族と、コリントスの歴史におけるキュプセロス一族の運命は不思議なことによく似ている。このことからどのような結論がひきだせるだろうか？ ルイ・ジェルネは『僭主たちの結婚』の中で、僭主は、いかに改革者であろうと、「当然のこととして」伝説にその原型が見られると指摘している。「僭主の度を越した言動

のモデルは伝説の中にある」と彼は指摘する。ヘロドトスの語りは、初めから終わりまでこのようなモデルに導かれている。歴史の父ヘロドトスは、僭主の血筋がコリントスのリーダーとして君臨するにいたるできごとを事実として伝えているのだが、その際「当然のこととして」神話化しているのである。彼の物語を分析すると、そのままそれはオイディプス伝説にも適用できる。ジェルネはコリントスについて「伝説の見方をすれば、僭主政は破壊的な結婚から生じたとか考えられない」とはつきりと述べている。われわれはラブダコス一族に関する系譜物語の中には、脚の障害、僭主政、権力の獲得と失墜、世代の継続と断絶、正しい継承と逸脱した継承、正しい性関係とゆがんだ性関係、父親と息子、あるいは息子同士のコミュニケーションにおける合意と誤解、敏捷な精神と魯鈍といったテーマがあることをはつきりさせることができたが、こうしたテーマをヘロドトスが取り上げ、密接に関係付けたのはなぜだろうか。それは、紀元前五〜四世紀にギリシア人が思い描いた僭主像が、選ばれた者であると同時にに呪われた者でもある伝説の英雄の姿とびつたり一致したからである。僭主は、ギリシア人にとっては共同生活の基盤であるルールをすべて拒絶して、オフサイドポジションに身を置く。つまり市民と市民、夫と妻、父と息子が正しい規範に従って結び付いている人間関係のネットワークの外に僭主は位置するのである。個々の人間は伝達手段を通じて互いに交流し、文明化された共同体を構成するのだが、僭主は良きにつけ悪しきにつけ、あらゆる伝達手段を断ち切る。踏み固

められた道や標識のある道を拒み、逸脱した孤独な道に分け入る。人間の住む都市からはるか遠くに追いやられ、僧主は神の孤立にもまた野獣の孤立にも等しい状態に追い込まれ、それらのものと交換をしたり相互に接触したりして道を進む。神は人間の掟に従うにはあまりにも高いところにあり、野獣もまた己の欲望の赴くままに行動して禁止を破ってしまう。社会組織の構成をつかさどり、つながりの規則ただしい交差を決定するルールを、僧主は破るのである。プラトンはもつと露骨に「僧主は自分の父を殺し、母と床をとみにし、わが子の肉を貪り食うことも辞さない」と言う。このように僧主は、神にも等しく、また獐猛な野獣にも等しい。この両義性を持つゆえに、僧主は、二面性をもつ跛行者という神話上の人物像を体現しているのである。脚に障害のある者の歩行は、人間より敏捷ですばやく、同時にあらゆる方向に回転して正常な歩行の限界を打ち破るので、人間の歩き方より勝っている。しかしまた同時に、どうがんばっても正常な歩行には及ばない。なぜなら、悪い足をかかえて平衡を失い、よろけながら奇妙な歩き方で足を引きずって歩くのは、それは最後によりうまく転ぶためではないのだから。

解説

一九一四年生まれのジャン・ピエール・ヴェルナンは、今日のフランスを代表する神話学者である。デュメジルやヴィーエストロースの成果を取り入れながら、古代ギリシアの社会心理を解明する彼の方法は、神話学に革命をもたらした

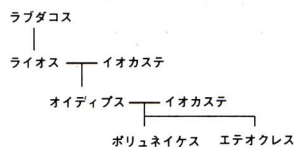
と評価されている。一〇冊以上におよぶ単著のほか、デティエンヌやヴィダル・ラナケとの共著もある。

本論は、一九八六年に出版された『神話と悲劇二』の中に収められた、オイディプスに関する論文である。ヴェルナンは一九七二年に、「コンプレックスなしのオイディプス王」と題された論文を発表し、フロイトのオイディプス論を痛烈に批判した。この神話はむしろ政治・社会的に分析されるべきであることを提案している。一四年後に出版された本論はさらにこの立場を推し進め、神話が伝えるテーバイ伝説と、歴史が伝えるコリントスのキュブセロス一族との類似を証明することによって、古代ギリシアが「独裁者」について抱いていたイメージを、いかにオイディプスの一族が体現していたかを論証している。

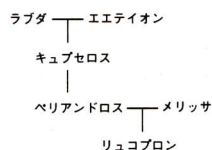
スペースの都合で、原注も訳注もつけられなかったことをお詫びしたい。

系統図

ラダコス一族



キュブセロス一族



(うえむら くにこ・神話論/ジェンダー論)
(あいは ちよこ・神話論/フランス文学)